

ニイ  
ガタ

# 安吾賞

## 第2回授賞式

安吾賞とは、生きざま賞である

時空を超える町歩き

日和山 12.3 mのキセキ

路地連新潟代表・日和山五合目館長

*Mouchi Takahiro*

# 野内隆裕



# 3/21

 2018  
(水・祝)

## NEXT21

 新潟市中央区  
西郷通6番町866番地

◎入場無料

◎授賞式&トークライブは、事前申込が必要です。

申込方法／電話にて申込み (2/22・木 8:00より)

025-243-4894 (新潟市役所コールセンター 8:00~21:00)

先着 500名：代表者の氏名、電話番号、人数 (2名まで可)

## 授賞式&トークライブ

 ※手話通訳あり  
＜6F/新潟市民プラザ＞

●13:30 開場 ●14:00 開演 (16:30 終了予定)

トークライブ「新潟は砂の町ですな」

出演者：野内隆裕

佐々木知範 (NHK「ブラタモリ新潟」制作者)

記念展示 ＜1F/アトリウム＞ 3/21 (水・祝)～3/27 (火)

●8:00～23:30 野内隆裕氏活動の記録展

# 第2回 ニイガタ安吾賞 野内隆裕

(のうち・たかひろ)  
1968年(S43)新潟市中央区下町(しもまち)生まれ  
路地連新潟代表・日和山五合目館長

野内隆裕氏は、小路を歩く楽しみなどの中央区下町(しもまち)を中心とした地域の魅力発信に取り組み、1997年にはインターネットサイト「にいがたなじらねっと」を開設。2002年には自作の小路案内版や地図を製作し、まちあるきのガイドを始めました。その後も地道に活動を続け、2008年には「路地連新潟」を結成。行政と連携し、観光マップ「新潟の町・小路めぐり」を製作したほか、まちあるきの休憩スポット・カフェ・資料館を兼ねた「日和山五合目」をオープンするなど、まちあるき関連の取り組みを広げています。

現在は多くの方が賛同し、その取り組みが広く知られています。まだ注目度が低かったまちあるきを、自分の信念を貫いて続けてきたその姿はまさに、

- 【反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する】
  - 【日本人に大いなる勇気と元気を与える】
  - 【明日への指針を指し示すことで現代の世相に喝を入れる】
- とする賞の趣旨に合致し、まさに「現代の安吾」としてふさわしいと評価されました。

### 本人コメント

自分の町にとって、意味のある、歴史ある場所であっても、まちの変化によって忘れられてしまう事がある様です。また、失ったものに関心は向けられがちですが、そこに残っているものの価値に気が付かない事もある様です。

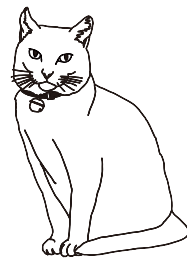
「新潟の町・小路めぐり」「進化する日和山物語」の取り組みは、見過ごされがちな町の魅力に着目した「あるものがし・みがき」の実践例でした。先ずやってみせる。そんな小さな一歩でも、大きな進化に繋がる事が、誰かの勇気に繋がれば幸いです。

この度の受賞は、これらのプロジェクトに関わってくれた皆さん。また現在一緒に町を歩き、新潟の町や日和山(12.3m)を楽しみ、その「楽しさ」を発信して下さい。「路地連新潟」「日和山委員会」の皆さんと共に、いただいたものと、私は思っております。

新潟の町には「なにもない」のではなく、「あります」よね。これからも皆さんと共に、その「楽しさ」を発信しつつ、「進化」していけたら幸いです。



まちあるき Map



# ニイガタ 安吾賞 2017



安吾賞とは、生きざま賞である

## 坂口安吾年譜



**生誕** 明治39年(1906)10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染めず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒蕪たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

**余は偉大なる落伍者となっていくの日か歴史の中によみがえるであろう** 大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学校3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていくの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

**求道者、安吾** 大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続

け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

**文壇デビュー** 昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふるさとに寄る讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』(S15)、『木々の精、谷の精』(S15)などの新境地をひらく。

**小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美** 昭和17年、国粹主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を呑み込むことの欺瞞を指摘した。

**墮ち切ることに真実の救いを発見せよ** 昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本

質を洞察し、4月『墮落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『墮落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の禪を洗う女』を発表。**戦う安吾** 昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐる『負けレレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』(S27)発表。

**急逝** 昭和30年(1955)2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48。